

## —巻頭言—

## 日本医科大学としての対応

田尻 孝

日本医科大学学長

## Our Response and Dedication to the Devastating Disaster

Takashi Tajiri

President of Nippon Medical School

未曾有とも想定外とも呼ばれる今回の東日本大震災からすでに半年が過ぎようとしています。震災の残した傷跡はあまりに大きく、簡単に総括できるものではありませんし、われわれ医療人にとりましても一人の人間として、そしてプロフェッショナルの職業人として思うことは多々あります。今後の復興に向けて取り組む上で、震災直後からこれまでの大学としての対応を振り返ってみたいと思います。

震災発生後、直ちに本学のホームページ（HP）上で、「被災者の方々に対するお見舞い、亡くなられた方々へのご冥福をお祈りするとともに、ご遺族に対し心よりのお悔やみを申し上げ、被災地の皆さまのご無事と一日も早い復興を心よりお祈りする」旨のメッセージを発信いたしました。

さらに、教職員・学生には支援活動の要請があればいつでも応じられるよう、準備をしておくように通達を出しました。

教授会では、本学の教職員・学生がいろいろな形で支援活動をしていることが確認され学長として大変心強く感じました。心より御礼を申し上げ「今後も援助の手を惜しまない覚悟でいると思うが、このような時こそ各自が慎重に考え、行動し、被災者の痛みを少しでも共有していこう」と述べさせていただきました。

4月、予定通り入学式を執り行うことが出来ました。この特別な年に入学した新入生諸君に対し、式辞のなかで「今日から医師への道を歩み始める皆さんは、生命を奪われ幸せな生活を奪われた方々の悲しみを、自分のこととして思い至る心を大事にしてください。医師とは人々の命を守り、健康を保ち、向上させるという使命を帯びた職業です。今度の惨事を医療人としてどう受け止めていくか、真剣に考えていただきたいと思います。」と述べさせていただきました。

同窓会総会および支部総会においても大学HPなどとも重なりますが、具体的取り組みを改めて報告して参りました。以下にその一部を挙げさせていただきます。

1. 今回の大震災に対し、本学はいち早く災害派遣医療チームDMAT(Disaster Medical Assistance Team)の中心として、4病院から多くの医師、看護師、学生などを被災地に派遣し、救援活動を尽くしました。先遣隊は文字通り道なき道を踏み分け、震災当日の深夜零時過ぎには現地の支援拠点に到着してくれました。このことは特に本学学生、初期研修医にとって、「日本人として、一人一人が少しでも被災者の気持ちを直接分かち合えれば」という気持ちで貴重な経験となったと思います。

2. 復興が長期化する中、クラッシュシンドローム、精神的ケアなどに対しても多数の医師が応援に参画しております。

3. 震災直後より、学生は街頭募金活動を開始いたしました。これは、学生が自主的に行った活動ですが、この活動を通し医師を志す者として重要な、チームワーク精神育成の上からも様々な勉強をしたと思います。また、法人・大学・同窓会が一丸となつての募金活動も開始いたしました。

4. 被災された学生に対し特別奨学金あるいは学納金減免などの特別措置をとりました。

旺文社が、高校生向けの Web ページ『パスナビ』におきまして『苦難と向き合う、高校生のキミへ』という応援企画を行いました。その中で全国の学長からのメッセージを色紙に寄せてという企画があり、以下のようなメッセージを送りました。

「少し早く大人になってしまう君たちへ 大人とは『今できることを責任を持って行う人』です そして行った事を次の世代に伝えて下さい 誰よりも誇りをもって」

今回のような未曾有の大震災がわが国に起こることは、想定内のことかもしれません。しかし、原発事故に代表される多くの「想定外」の出来事が被害をより深刻化させたのも事実です。常日頃から備えを怠らないことが唯一の策ではありますが、今回のように圧倒的な自然の力の前では手も足も出ません。しかし自然の脅威に翻弄されながらも、多くの方々がその瞬間、瞬間に自分のできる精一杯のことを、一命をかけ、責任を持ってやり遂げたことが被害の更なる拡大を抑えたのも事実です。「今自分に何ができるのか、自分に課せられた責任は何なのか」これを常に自分の中で意識しながら日々を送ることが最低限の備えなのかもしれません。私たちは患者さんに向き合う中でもしばしばこの想定外の事象に遭遇することがあります。単純に震災と医療人の職務を重ね合わせることは軽率かもしれませんが、「医のプロフェッショナル」の本質は究極的には一人の人間としてこのような場面であるべき姿につながるものと考えます。震災に立ち向かい、これから復興に向き合う多くの方々の誇り高き姿を次の世代を担う若者たちにはしっかりと目に焼き付けていただきたいと思います。本学の教職員、学生におかれましても今一度「今、自己の責任のもとに行えることは何か」を問いかけていただき彼らにその姿を見せていただきたいと思います。